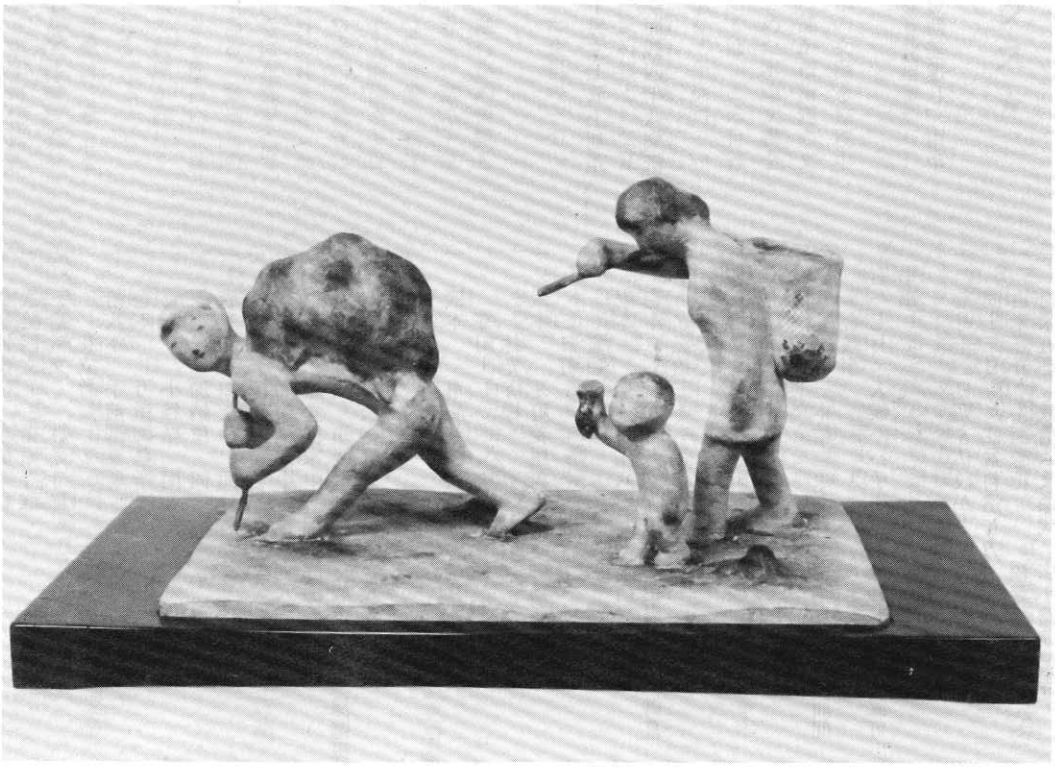
三　島　市　　（通巻第17号）

郷土館だより

Vol. Ⅵ No.2
1983. 11. 1



「磯」（三四呂人形・野口三四郎作）
市指定文化財　池田涼子氏蔵

目　次

本陣家の盆行事……1・2
日清戦争往復書簡……3・4
収集資料紹介・行事報告……5・6
テーマ展「野口三四郎と三四呂人形」……7

嘉永五壬子年
盆暮諸用留

樋口家

七月五日六日両日之内
梅原高木氏江生身魂
一　焼鮎四連
　但あゆ六本で一連
一　本まんしう　百文分
　茅町山川屋ニ而求
　外ニかご代払
一　生姜　拾把
〆
右柏原江
一　黒大豆　壱升
一　高田園茶百廿四文
　但上袋代共
一　本まんしう　百文分
右之通沼津清水江
一　高田園茶百廿四文
右沼津橋本屋江
右之通七月五日心掛け置翌六日下男文七辰上刻差遣申上斉頃帰宅いたし候事
　但小遣銭四拾八文相渡柏原ニ而銭四十八文紙
　一帖もらい候由

七月八日
一　さば大ひらき五枚
一　本まんしう　百文分
　右南条稲村友右衛門殿江
一　鯖大開キ　五枚
一　高田園茶　百廿四文
城之内隠居江
右ニ夕所七月八日己上刻頃下男勇助差遣し、申中刻帰宅いたし候事
　但し小遣銭三拾弐文相渡
一　素麺百文分程
一　よこわひらき五枚
右世古氏江遣す

一　拾六文　御召仕中
一　弐拾四文　宝勝寺様
一　弐拾四文　揚原寺様
一　三拾弐文　林光寺様
　花立竹
一　拾八本　手前御墓所
一　壱本　万屋御墓所
一　壱本　小谷屋　同
一　壱本　加納屋　同
一　壱本　つたや　同
一　壱本　原田屋定吉
一　壱本　高松様家中　細谷利八様
一　壱本　藤堂様家中　岡傅郎様
一　壱本　上州飯野御家中　飯田太之進様御母
一　壱本　高松様御家中又者　幾蔵殿
　広小路
　蓮馨寺様
一　弐本　車屋与惣兵衛様　御墓所
　芽町
　林光寺様
一　弐本　芽町菱屋善六様　御墓所
　二日町
　誓願寺様
一　壱本　桔梗屋庄八殿　御墓所
一　壱本　長谷町光安寺様　平田屋御両親御墓
　〆三拾三本
一　三拾弐文　連んけい寺様
一　三拾弐文　長谷町　光安寺様
一　壱本　長谷町成真寺　銭屋御墓所
　惣〆三拾四本
　八寸之竹三本結壱束ト外ニ壱本〆四本ニ而間
　ニ合候事
　右ハ七月ニ入候ハバ手廻次第一日も早ク拵置可
　申事
一　七月十二日朝ゟ仏段かざり可申事
一　同十二日寺々江盆料遣し方
一　白米三升　牛房壱把　福聚院
　白米五合　銭拾六文油代　広小路蓮馨寺
　但し口上書左之通り

子七月十三日よ戌上刻

当盆前迄不残ニ而足銭
金五両弐分ト
四百廿四文請取申候事

七月十三日
今日たんご米壱舛弐合程あらひあけ拵申候
昼後もち三舛つきあんなし小丸もち
三十小のしもち壱枚取あと残り之分皆
あん入丸もちニ致し申候夕七ツ半頃ニ至り
御先祖様方御着後何ニ而も菜一ツ
香之物付白飯相備申候　今夕申下刻仏参
として保之助おきくおいしお今幾太郎
下女おみとおとみおたか手代小治下男
勇助〆拾人ニ而御寺江罷越和尚様
御面会火ともし時分罷帰リ申候万屋
ちとせやハ先年と違近頃一同ニは参り
不申候保之助儀者福聚院ヨリ直ニ成真寺
光安寺江罷越夫ゟ蓮馨寺林光寺
仏参仕舞酉中刻頃帰宅いたし候申下刻頃西瓜壱ツ
割相備申候

七月十四日
今朝御仏段江拝礼したし早昼飯ニ白かゆ汁（とうがん午房十六はじき豆）午中刻西瓜壱ツ
割相備申候申上刻頃茶飯相備申候但御平
いも午房十六とうがん豆腐〆五品ケンチンニいたし皿はすいも生かあぶらげごまずあへ
手塩香之物御汁あられ豆腐右之通いたし差上申候
今昼後支度いたし置酉上刻頃あづき飯
壱舛五合焚むすび口取ばち江沢山ニ入おがらのはしヲむすび江さしあけ其上にしめ添差上申候
（但いも午房やき豆ふ源氏まめにんじん）
〆六品にしめ申候
右差上其上丸ひよ塩もみ汁あけ銭五百文
包相備御暇乞いたし明松ともし仕舞夫ヨリ
戌下刻頃相休申候

（杉村）

三島本陣文書整理

★トピックス★

本陣家の盆行事

（嘉永五壬子年、樋口家の盆暮諸用留から）

三島宿二本陣の一、樋口本陣家の文書を整理中である。当本陣文書は、すでに一部が市指定の文化財にもなっているが、これも含めた本陣文書全容は明らかではなかった。郷土館では、この目録を作成するとともに、文書の解読も、今進めている。解読作業には、わが古文書読習会々員（約三〇名）が当っている。近々、本陣資料集として発表できるものと思う。

解読作業の中から、話題となった資料の一つ「盆暮諸用留」を取りあげてみたい。

本陣を務める程の家になると、盆行事の規模も一般の家庭より余程大きいものと思う。盆の十日前には、焼鮎、本まんじゅう、しょうが等の調達を始めている。寺詣りも数多く、十人前後の下男下女が手分けして回っている。樋口家の菩提寺は福聚院（北田町）であるが、この外に林光寺（加屋町）光安寺（日の出町）等数箇寺に布施をしている。交際の広さを物語るものである。盆当日の七月十三日、十四日の記録がもっとも面白い。盆にこしらえるモチの種類、供え物の料理が詳しく記されている。確かな民俗資料である。

現在の習慣との比較など詳しい考察は、まとまった資料報告に譲ることとし、ここでは解読文を読んでいただきたい。（資料提供・南本町樋口正智氏、解読・三島古文書読習会、報告・杉村）

七月十日
嘉永五子七月十日積金御利永去亥暮八分通り御下ヶ之内去暮六分通り御下ケ　有之残り二分通之分
今日頂戴左之通り
一金四両壱分
永弐百拾七文六分五厘
内永五拾三文八分為登賃御引取
差引
金四両壱分　全奉受取候
永百六拾三文八分五厘　此金四両一分二朱
銭弐百六拾六文全受取
右御下之趣一昨八日御書付被下候ニ付
昨日九日延し今日為総代世古氏御出　被下候事未
上刻頃御帰り被成候
二付保之助御挨拶ニ罷出候事昨よ
印形取集ニ付拙家印形江四十八文相添
大和屋江遣し夫ゟ　順々廻し弐百文ニいたし
世古江相渡候事
嘉永五子盆前町内勘定
左之通り
一　金壱分弐床ト　惣納高
九〆四百三拾八文
内　二月十二日ゟ六月廿九日迄
八メ三百文メ百六十六日四拾八文づつ内掛銭之分納
差引
金壱分弐朱ト
壱メ百三拾八文
此金弐分ト　七月十日夜
三百弐拾壱分皆済いたし候
右此分金残高書付ニいたしおたかを以銭屋江為
持遣し申候則受取書取置申候
〆
七月十二日
一　銀壱匁　横山氏江参礼
但し古ふ屋具廿四枚外ニ付薬一包おき具之分
一　弐百文　横町定綱殿江療治弐度分礼
一　明十三日仏参之節包銭
一　青銅弐拾疋　福聚院
一　弐拾四文　御弟子様

覚
一　白米五合
一　銭十六文油代
右ハ例年之通車屋与惣兵衛仏前江御備被下候様
奉願上候以上
七月十二日　樋口伝左衛門
右之通いたし遣申候
覚
一　白米五合　銭十二文油代　二日町誓願寺
一　右者例年之通桔梗屋庄八仏前江御備可被下候
以上
七月十二日樋口伝左衛門
七月十三日
一　百文　番人　市助生身魂
一　百文　同　根木川太兵衛同
七月十五日
一　拾弐文　市助　盆の祝儀
一　拾弐文　根木川　盆の祝儀
右之外ハ年中仕切之事故
遣し不申候得共盆之事故参リ
候ハハ其節者三文ツ、も遣し可申
事但五節句ハ五文ツ、登
心得置可申事　当子
去亥十二月廿六日ゟ五月廿一日
迄分会所足銭受取高
左之通
一　金弐分弐朱ト
三拾五〆七百弐拾四文
内拾八貫文　内取
又金壱両壱分　内取
差引
〆拾壱〆七百廿四文
内壱〆八百文間遣盛込之分引く
惣差引
金壱両弐分ト　但六四わり
三百廿四文全受取
右之通今夜直右ェ門受取参リ候事

日清戦争往復書簡（タマヨケオクレ）

これから御紹介する3通の書簡は、戦地に居ながら故国の家族の暮らしを気付かう戸主安藤雅次郎氏の書簡と故国から戦場の息子の安否を心配する父親傳兵衛氏の書簡である。時は明治27年10月28日（夫より妻へ）、同年12月2日（父より息子へ）、翌28年5月13日（父より息子へ）である。いわゆる日清戦争最中の家族往復書簡である。

明治27年10月、戦争は日に日に激しさを増してきたものと思われる。雅次郎氏は敵味方相方にかなりの死傷者が出たと伝えている。戦場で誰かに聞いたものであろう。タマヨケ（鉄砲難除け）のお守りを送れと書いてきた。戦闘の激しさが伝わって来る。これに対して故国の家族は大あわてでお守りを取り寄せ、送っている。父が息子に送ったお守りは、「鉄砲漫陀羅」と呼ばれていた南無妙法蓮華経の題目札であった。(写真)

明治28年5月、戦争終結も近い日のこと、父より息子へ至急便で便りが届けられている。コレラ流行のニュースを知った父は、今度はコレラ除けのお守り4種類を取り寄せた。なるた山(成田山)なむあみだぶつ、水天宮、これら病よけである。このお守りは残念ながら残っていないので、詳しくは判らない。

戦争という異常事態の状況下、一般の人々はこれから逃ることが出来るわけでなく、せめて鉄砲の難は、あるいはコレラは、故郷からのお守りで防ごうというのが精一ぱいの抵抗であったに違いない。

夫より妻へ（雅次郎より美根へ）

〈宛先〉大日本帝国静岡県伊豆国
君沢郡三島町田町
安藤雅次郎方
美根へ　　従朝鮮

「陳ハ先日ノ御書状ハ本月十六日ニ私ノ
処ニ来りました御地ニてハ一同御
無事ノ由奉大賀候附て長岡
村々社も出来ノ事田中村金円（ノ）申先
日返金ノ様子ニ候得共実々御
返金ニ成ましたか万一取なくバ
御書面を乞フタマヨケノ御守
願有様ニ承り其守ハ紙なれバ
御書状内ニて御送可被降度不守
なれば宅ニて御祭り可被降度小生
等ハ明日ヨリ陸路ヲ仁川地方へ
向候出発本月廿七日ノ戦モ日本
大勝利支那兵三百人余死
傷大砲三十四個方取日本兵ハ
少カニ七十人ノ死傷者ニて度々
戦ニ勝近々ノ内ニ小生等も
帰宅が出来（る）様子ニ候間御安
心を乞フ先日も申上ノ通り
朝鮮国ハ気候不順ニて
病人多シ我工兵隊ハ半数
程病人ニなり私ハ御前方ノ
をかげニて無事ニて勉
居ます故に御安心可被降度御
地ノけいきハ如何之有哉同度
先日も申上候通りなるべく
むじんハ取ない様せいぜい
掛金可被帰候様沼津宮町
の利子ノ事も手数ながら父
上と相だんの上納置様
北条村小川様ノ残金ハど
をなりました此も伺度
私出張ノ時の着物類ハ
兵友ノ名古屋朝日町九十四
番戸ノ早川豊次郎方ニあ
ずけ有ます（中略）
右様私知友人ニ宣敷
御伝へ可被降度返事ハ早
々御出様上書ハ
朝鮮国仁川ニて第三師団後
備工兵第一中隊第五分隊工兵
上等兵安藤雅次郎ト書出ス
様
十月廿八日　　雅次郎
美根へ」

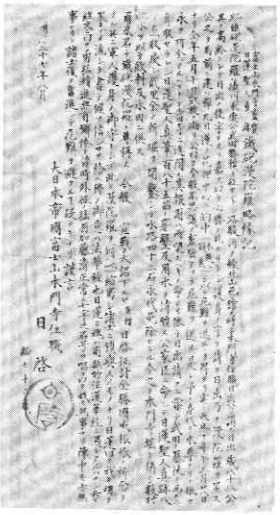
〈発信〉十月廿八日
釜山港ニて　第三師団後備工兵三大隊第一中隊　第五分隊
上等兵　安藤雅次郎

父より息子へ（傳兵衛より雅次郎へ）

〈宛先〉朝鮮国仁川港
第三師団後備工兵第一中隊

第五分隊上等兵
安藤雅次郎　殿

「前略御高免被不度候扨て去月廿六日御差出しニ相成御書面十二月二日午前第十時到着致し拝読仕候処其許儀無別条謹（勤）務罷在候由大賀之至リニ存候幸家内一同無異消光罷在候間此段御放神被不度候次ニ其許釜山港より差出申候書状十一月三日到着仕因而同日夜九時半頃御守封入致候而返書差送り事候間多分ハ其許釜山港ニ滞在中当ニ仁川へ行届き居り候事と被考候故仁川港の郵便局御取調べ可被成候尤も其レニ付他よりヨオヨオの事ニテ大切なる清正公様の御守今日入手致候ニ付其許迄差送申度候へドモ又候前の如ク行違ひニ相成届兼候節ハ残念至極ニ存候間御返事次第仁川港成或ハ大同口へ成共差送可申候間此書面到着次第確かなる処を御通報可被成候
猶十一月三日ノ夜九時半御守ト返書差上申候其折長岡村社の計算大略に書入候而差送申候其後みねよりも十日頃書面差出し申候是にハ御入手ニ相成候哉猶伺度候御申越の在韓兵士家族の者へ有志者より手当として金六円十月廿日頃下付ヶ相成候ニ付直ニ銀行へ預ケ置其許帰国の折使用可致心組ニテ（他を差くり都合十円）楽みおり候、前差出し申候返書の内ニも申上候当町コミ山様の御様子相尋ね久保町栗原様方迄御通知可被下趣き栗原より御依頼有之候間同氏の様子相尋ね栗原方迄御返事可差上此段申進候也
十二月二日午后第弐時出ス
安藤雅次郎殿
安藤傳兵衛拝



（追伸）
家内一同打つどい其許謹勉功名の上無事帰宅を日々祈朔日十五日廿八日ニハ必ス風雨ニかかわらず氏神ベ参詣おこなりふ申」

〈発信〉大日本帝国静岡県伊豆国君沢郡
三島町田町
明治廿七年十二月二日　安藤傳兵衛拝

再び父より息子へ（翌28年5月13日発）

〈宛先〉支那国金州半島大連湾
第三師団後備工兵第一中隊柳樹屯ニテ
第五分隊陸軍工兵二等軍曹ノ
安藤雅次郎殿エ

「一寸申上候扨て御地ハこれら病気はやり候ニ付困難の由にて居り候ときゝ実にをどろき入候ため早足此これら病のよけ御守り差送り候間あらためて御受取被下度候何分帰（る）身の上大切にねがい桝此手紙届き次第返事を被下桝
なるた山　　なむあみだぶつ
水夫宮　　これら病よけ
メ四いろ也
大日本静岡県伊豆国三島町
田町六百十三番地ノ　安藤傳兵衛ら
第三師団後備工兵第一中隊
第五分隊陸軍工兵二等軍曹の　安藤雅次郎エ」

〈発信〉大日本帝国静岡県伊豆国君沢郡
三島田町六百十三番地ノ　安藤傳兵拝
廿八年五月十三日発ス　　（杉村）

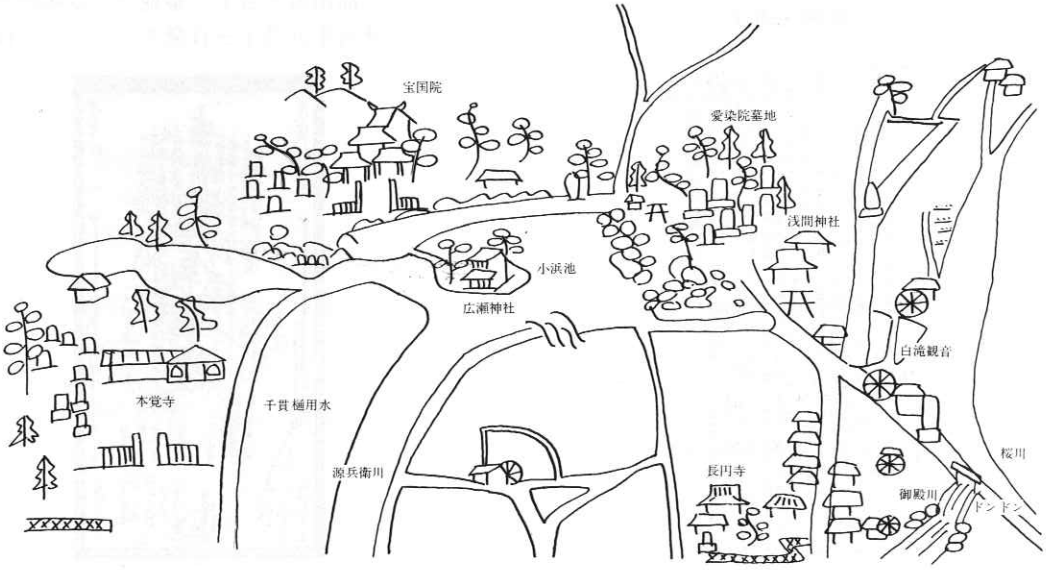
■収集資料紹介■

「小浜丘之図」　市内一番町　**緒明太郎氏提供**

明治23年、畔柳対水という画家によって描かれた小浜池とその周辺風景である。現在の楽寿園とその周辺なのであるが、今とは余りにも違う景観に驚くばかりである。簡略図によって、判明できる主要な建物を示してみました。

（杉村）

小　浜　丘　の　図（現楽寿園とその周辺）



■行事報告■

夏の親子郷土学習会「三島の河川」

7月31日(日)～8月2日(火)の3日間に亙(わた)って親子郷土学習会「三島の河川」の講座を実施した。

この講座はひとつのテーマを親子で一緒に勉強し、その中から親子の対話、交流、共通の認識を持ち合い青少年の健全な発達、育成に寄与しようとする目的で毎夏行なわれるものである。今年は三島市が水緑都市宣言をしたことにちなみ「河川」をテーマに取り上げてみた。

講師には市内河川を独自に調査している秋津亘さんにお願いし、小学校4年生とその親66名を受講生に講義と現地調査を実施した。

受講生の多くは他市から三島に移って間がない人が多く、川の名前すら知らない人が大半であり、河川名と実際に目の前に流れる川とを一致させ覚えてもらうという初歩的な事から始めたが、講座終了時の質疑では三島の水問題にまで話が及び大層に理解が深まったことを感じさせた。

この中で特に活発に話し合われた事は渇水と生活（中郷地区の米作への影響）、あるいは水辺景観であった。

「水の都」といわれたかっての三島は、中郷地区の田を潤すことにより実用面で役立っていたし、また花見や魚釣り、水遊びなどのレクリエーションの空間としても利用されていた。もちろん今でもそうした水辺が皆無ではないが、生活の中に占める比重が変ってきた。昭和30年以降の「高度経済成長」と軌を一にして、身近な空間としての水辺が次々と姿を消していった。河川の暗渠化により人々の意識の中からも水辺がなくなり、水辺の破壊は水質にも及んだ。河川の流量が豊かで、流入する汚水の量がわずかであるならばそれも益となろうが、度を過ごすとそれは生物の住めない死の世界と化してしまう。さいわいに三島市ではこうした問題に早くから気がつき、水の確保、水辺景観の保護、中郷米作地帯への用水確保へと不断の努力が続けられてきた。その為今日まだ「水の都三島」のイメージを保っていることを評価できる。さらに私達の努力は今一層必要となろう。

短時間にこれだけの内容を理解させた秋津さんの功績を多としたい。

次にこの講座に使われたテキストを参考に抄したい。

三島湧水と御殿川

大場川と境川は、ともに三島の東西をふちどる河川です。その水源は、遠く箱根の山伏峠あたりにあって、三島湧水と関係ありません。

境川は、上流はか水谷です。古くは山伏峠からの水は、境川に流れていたのですが、大場川の河床が低くなるにしたがい、いつのころか流れは境川から大場川へ移ってしまったということです。

大場川と境川にはさまれた間が、かって三島の宿駅だった旧市街地です。

三島湧水は、いま5つの流れとなって、市中を貫流しています。しかし、人の手が加わらぬ以前の自然流路は、御殿川ひとつです。

それでは、湧水ごとに、その流路を探ってみましょう。

菰池湧泉は、水泉園の湧水を加えたあと、桜川となって祓所（はらいど）へ向っていますが、桜川用水ができる前は、白滝観音堂あたりから、久保町（中央町）の低地へ、滝となって落ちていました。

滝の落口あたりで、浅間神社の水が加わり、御殿川は久保町から田町にかけ、広い河蝕低地を作って南流します。

つぎに、小浜湧水から流れ出る源平川を見ましょう。

広瀬から、蓮馨寺脇をぬけ高台町へ流れるこの川は、天然の川のように見えますが、これもまた中郷用水田を潤す用水路です。

いま、広瀬橋のところに1つ分水口があります。ここから出ている水路を追ってゆくと、これがヤオハンの東側から銀座劇場横をへて、伊豆箱根の線路をくぐり、レストラン瀬里の北で御殿川に合流しているのです。もと、この川の上流に、四の宮広瀬神社がまつられてあったことから四の宮川と名付けられたといわれています。

広瀬から大中島をへて、銀座劇場に向って、おわん状にくぼんでいる地形からしても、小浜湧泉の自然河道は、この四の宮川の流路にあったものと思われます。

菰池から御殿川を、小浜池からは四の宮川と、2つの流路をもって、市の中央部をY字形に彫りあげた古御殿川は、まさに三島の母なる川というべきでしょう。

◎桜川水系（用水路）　◎小浜用水路系（用水路）　◎源平（兵衛）川水系（用水路）　◎浅間神社水系（用水路）　◎御殿川水系（自然河川）　◎大場川水系（自然河川）　（稲木）

テーマ展「野口三四郎と三四呂人形展」のオープン。（市指定文化財に24点が）

今秋のテーマ展「野口三四郎と三四呂人形展」は、11月30日までの約２ヵ月間の会期で、去る10月７日㈮オープンした。

今テーマは「三四呂人形の製作者野口三四郎氏が亡くなって約半世紀。散逸した作品の保護、保存と展示を行い、忘れられようとしている郷土人形作家とその作風を偲び、故郷をより理解いただくと同時に、文化財愛護の精神を養いたい」。

10月７日のオープニングセレモニーは、教育長、市議会議長、三四郎氏の長男野口冬樹氏をはじめ資料提供者など多数の出席をいただき、午前10時より、秋晴の当館玄関前広場で、「開会式」が挙行された。

教育長のあいさつで開始された開会式は、来賓の祝辞の後、三島市文化財に指定された三四呂人形に対し、指定書が交付された。指定を受けた物件は、野口冬樹氏所蔵の「水辺興談」など24点（所有者12人）で、いずれも、市内の所有作品又は、寄託作品である。三四郎人形が市文化財の指定を受けた事は、当テーマ展の趣意であり、また資料所有者にとって、作品の保存、保護に対する意識の高揚と強い励みになるかと思える。

指定書交付の式後、前記３人により赤白のテープにハサミが入れられ、テーマ展「野口三四郎と三四呂人形展」が幕あけとなった。

会期中たくさんの方々のご高覧をお願いします。

（梅田館長）

■編集後記■

厳しかった残暑も去り、楽寿園の木々も少しずつ色づき始めました。今年も美しい紅葉が期待されそうです。

産休のため、３ヶ月ぶりに郷土館に出勤し、その変化にびっくりしました。９月に一階テーマ展会場が改装されたのです。かって、うす明い照明の中に、展示物がぼーっと浮き上がって、寒々とした感じだった室内が、明るい組み木材を上下にあしらい、さっぱりした白い壁紙に囲まれ、広いガラス戸と用いた近代的展示場に生まれ変わっていました。折りしも、三四呂人形達が、50年の年月を感じさせず、はればれと座っておりました。

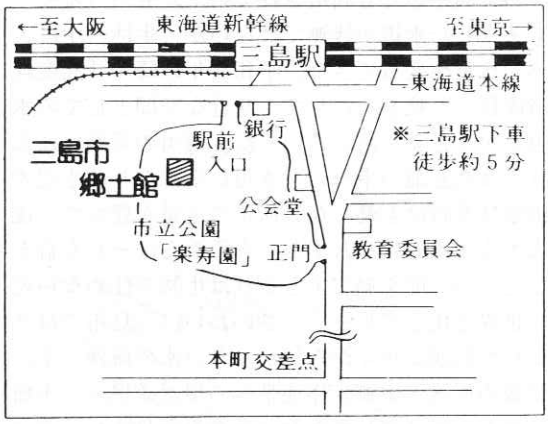
唯、残念ながら、予算の関係で、半分の面積の改装に止まっており、ちぐはぐな印象を与えます。残りの部分の早期の改装が望まれます。（福田）

●展示概要

１期日　10月７日㈮～11月30日㈬
２展示内容　(1)三四呂人形73点
(2)四季の絵、スケッチ画など約40点
(3)肖像写真、年譜、受賞楯等
３主催　三島市教育委員会
４後援　静岡新聞、ＳＢＳ静岡新聞

利用案内

休館日　毎月第１月曜・12月27日～１月２日
開館時間　午前９時～午後４時30分
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより No.17
昭和58年11月１日発行
（年３回発行）
編集　三島市 郷土館
住所 〒411　三島市一番町19－３
TEL0559－71－8228
発行　三島市教育委員会